



系侯問り
際名守さ
藝妓園
周縁

猫と道人原稿

系文会文系綴
守川周筆画

加々告らん

Z



金の七

胡蝶

まろろ

文系

分二編

上の巻

周重

しんせき



金花胡蝶幻筆式編序

余や往昔横濱在留の日朋友と宴するは間偶藝妓國助と接する時あり
彼所謂蘭蕙の質柳絮とすなり其父母乃教育厳びて且此婦の
性來韓壽の香を採め祇廟の燄を致し其質あり故に榮枯交々數夫を見え
て廉耻破ると思ふ其淫行一二の新聞紙面を汚さふ至り故らふいは
紙上ゆたて陸續掲載せし如き其事尤實に近く一讀して婦女子の
戒慎とる可きもの將來一小冊史止めて貞淫黑白を照らひ其鑑と
せしと書肆が需小社貞文京余が水莖の跡と踏以て有聲詩と全ふ
ちんちん嗚呼國助練裳竹筥削釵裾布の縷婦の非は採筆成文の
才の惜む一一點の紅廉耻を以て序とす

明治十三年七月

猫々道人魯叟題



48-7707

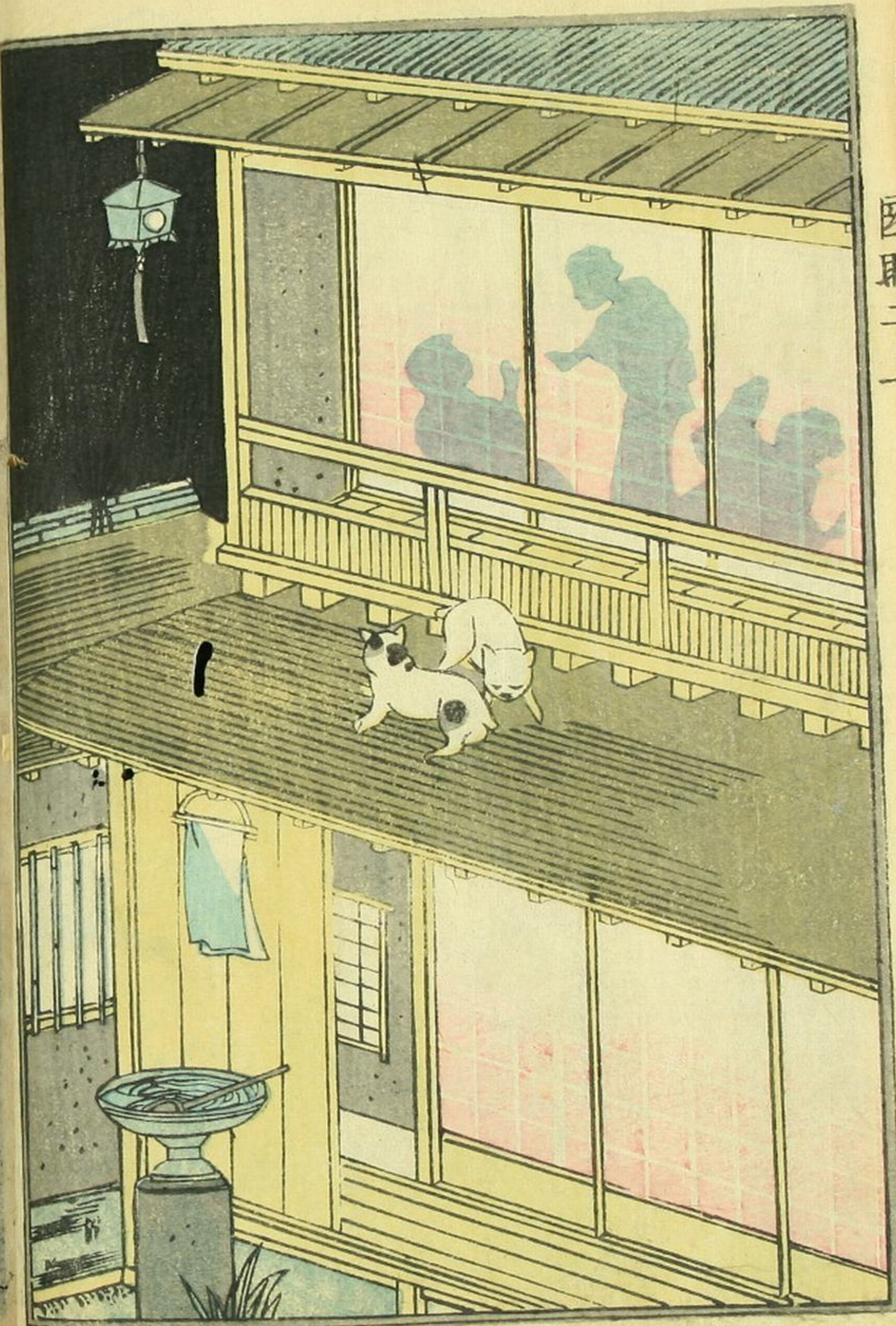


栄藏女房於玉

藝妓國助

遊客藤屋栄藏

四月二



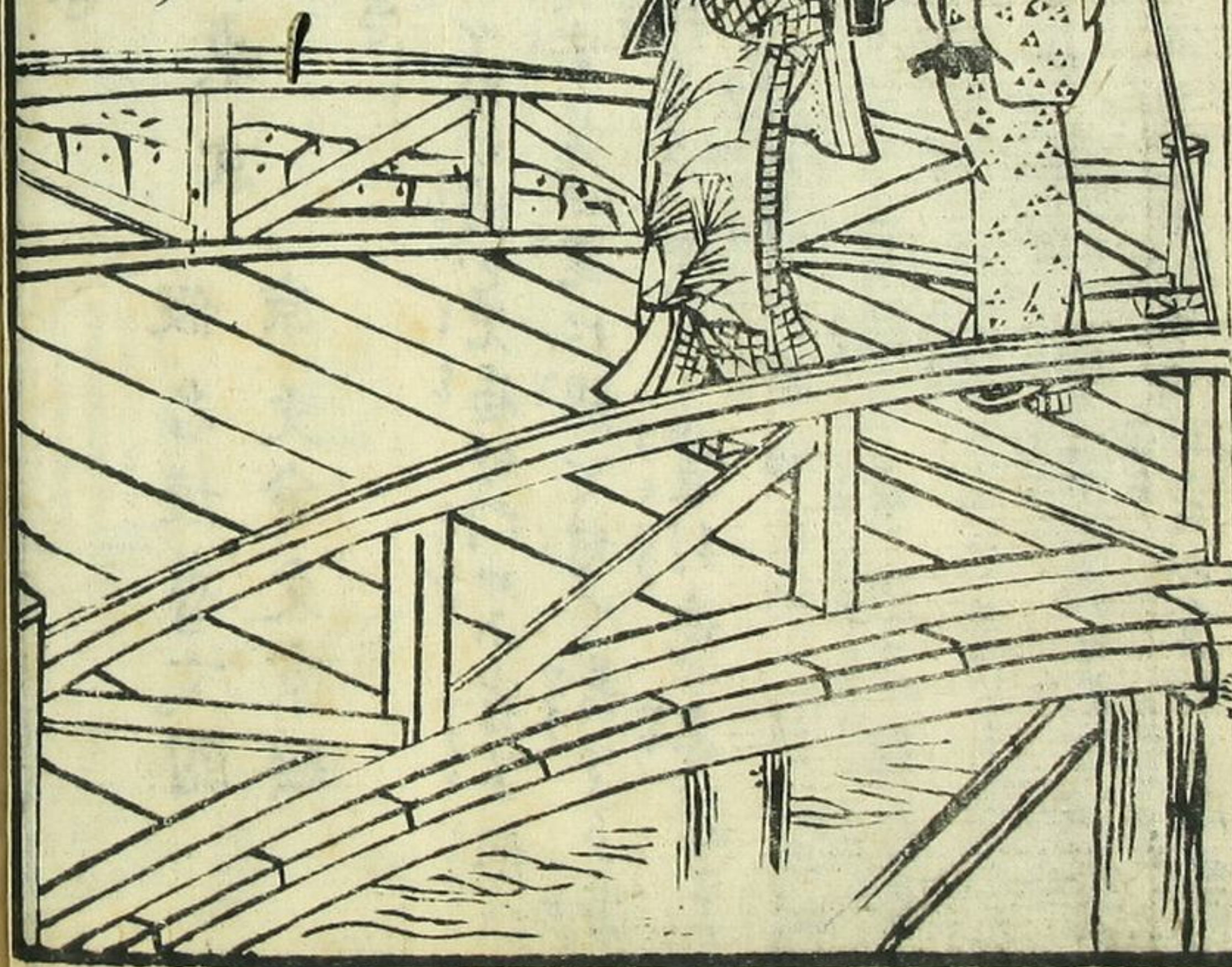
金花胡蝶幻第二編上之卷

東京 假名垣魯文閣 京文舎文京綴

初編より讀つて

○再読く彼の女房の髪束の紐をけつて襦袢と足届け門口の窓子何ひ
 葉束はあひまへてくは事や内室きん小尾に結を付て若はう常
 の行くらうおあありて僥倖さうやくと蒙引あげ急いそそ
 い降りゆく初て髪束へ紐着の二階窓を必助とさうむらひの紺
 初小結せと愚痴の酒罎り結口ひさあは僥倖の茶飲茶碗の強ッ
 飲りモシ葉さんお前へ好て振引せーとお静さんのある身乃う人
 妻はちうあひ義者初めいりやうあつても及りぬ意の静舞り
 末で考うると実実小細くてあういふと因え小會む夢窓夜叉

つきしめつゝのうら
 憂が膝と膝と
 アイタミ、是を助あひ
 出ーでも休て様ふ
 何とゆゑの此の
 支障と様ふ
 是と我の徳ッ
 て痛さを知るまに取らうで
 輕くてもいふに客筋お前
 疾うに紋を束が附て着るう
 何も心細いふいあるゆゑあま
 油とけきめく生ふるもの



後あると吸さず煙後の煙首
 と灰吹でホレく、疵めつ
 是の玉助ハツととくと
 後せぬ素あり
 髪と
 肩毛
 とつり
 あけてカヤ葉
 せん
 梅うで
 毎度の難影むす
 子も

此の
 自
 の
 子
 子
 子

つぎあるちねと梅りぬいのちめを口と開き
 不器でありませうが紋たえんは和風(和風)改
 文(文)が中へ送り出縁ふりんの昔の
 衣(衣)るるる物がある破棄(破棄)のけせんヨ
 と立懐(立懐)裏より取出し(取出し)虚実(虚実)の紋たえ
 より取あいの後(後)の二通(二通)後(後)の目
 ぬもあれは鼻であいらひ
 不(不)なる赤色(赤色)司(司)大切
 二(二)証(証)ある(ある)成(成)大(大)切
 小(小)は舞(舞)であれ
 死(死)んでも紋(紋)たえ
 梅(梅)りぬと互(互)ひ



後(後)と足(足)難(難)実(実)後(後)送(送)入
 其(其)何(何)か(か)とめ(め)掛(掛)りし
 後(後)茶(茶)盆(盆)肌(肌)滑(滑)り(り)た(た)る
 引(引)つられ(られ)ぬ(ぬ)何(何)べ(べ)る(る)る
 其(其)何(何)か(か)とめ(め)掛(掛)りし
 其(其)何(何)か(か)とめ(め)掛(掛)りし



小(小)の後の(後の)肉(肉)解(解)裁(裁)
 衣(衣)中(中)の(の)形(形)有(有)の
 表(表)の(の)方(方)の(の)端(端)免(免)な
 さ(さ)の(の)女(女)の(の)髪(髪)あ(あ)る(る)組
 既(既)中(中)の(の)目(目)を(を)り(り)出(出)して(して)ア(ア)ノ(ノ)お(お)二(二)階(階)の
 後(後)夜(夜)の(の)足(足)跡(跡)が(が)先(先)刻(刻)迄(迄)ひ(ひ)あ(あ)か(か)た(た)る



ア(ア)ノ(ノ)お(お)二(二)階(階)の
 小(小)か(か)つ(つ)た(た)糸(糸)ウ(ウ)と
 の(の)お(お)取(取)り(り)あ(あ)い(い)及(及)び
 ま(ま)せ(せ)取(取)と(と)既(既)中(中)の(の)ま
 ぐ(ぐ)つ(つ)く(く)と(と)二(二)階(階)上(上)り
 後(後)と(と)あ(あ)る(る)足(足)跡(跡)は(は)あ(あ)る(る)の(の) 日(日)あ(あ)れ(れ)バ(バ)次(次)へ





〆きごいの事
 左様な様様
 ふうと返答の程
 左様な様様
 栄のおまじつね
 秋家へ送り一回へ
 付後立様
 コレお玉自分の
 内ろ
 まじゆ
 秘蔵の
 代人の宅

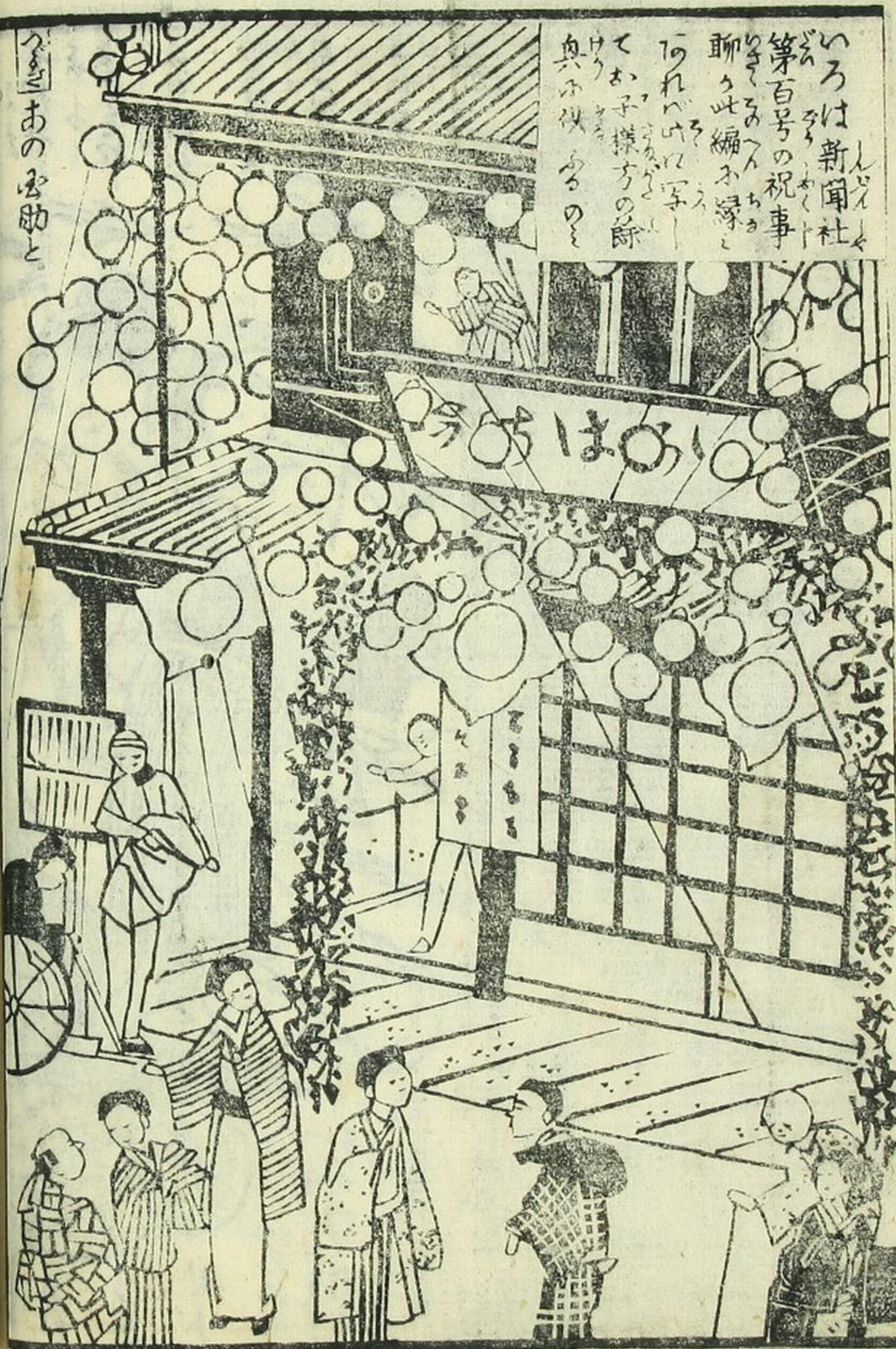
〆きごいの事
 左様な様様
 ふうと返答の程
 左様な様様
 栄のおまじつね
 秋家へ送り一回へ
 付後立様
 コレお玉自分の
 内ろ
 まじゆ
 秘蔵の
 代人の宅



〆きごいの事
 左様な様様
 ふうと返答の程
 左様な様様
 栄のおまじつね
 秋家へ送り一回へ
 付後立様
 コレお玉自分の
 内ろ
 まじゆ
 秘蔵の
 代人の宅

〆きごいの事
 左様な様様
 ふうと返答の程
 左様な様様
 栄のおまじつね
 秋家へ送り一回へ
 付後立様
 コレお玉自分の
 内ろ
 まじゆ
 秘蔵の
 代人の宅

陸
助
二
上



あのおと

不義を考へん
 實人小お花
 惚れとよに
 昔昔と
 まま
 ちやうど
 ぢやうど
 ぢやうど
 女園士
 まま
 ままの好
 人花も好と
 漸志て



成丈知分収振りも
 ありせうが今来込や毎日を
 愛結のおは同さんの旅にあらくと
 まいへく 浮木の涼きあひめと
 まるるもまいくで
 紋たると強
 ぐひまごまきあう
 他優ふひ故人三津五希あも
 お振と振えそのあふ加笑町
 のいうとうの使客とも
 海い
 中で



あつこと字
まふ まふ 習ま まふ と客 きやく の二飛 ふせ
門 かど 込 こ されぬ ぬ を
飲 のむ され さ る る お前 まへ は
客 きやく 飛 ひ を を つ つ く く ぞ

下き 迫のわお前の喉裏ふりゆくく ▲まづつ一生懸命「やまをせや
 持ッてさうくをさるゝ引せて横妻のさ 維さぬと太主より大由果れ喰
 との路をへ固ておくとも後手お前の自由は さる喧嘩を人ま嫌がさるまきろ
 かゝるふとと學び發ねて後手お前の心と惚く 路をふりゆくゝれ家内の子女
 は助の前のひづりへ女前と替付し他の 雇ひ男が支つる中を振切て素直
 口彼お限して我をえ重二のあつとあつ の役めて飛出れおま女店をさるの
 かまが練をさるゝと練身おじとさ上り ○おま後手の妻おま佛あゝぬ鬼前
 再び外へ出んとさる妻とさるく 彼を助ふえさるれ我の願と持さるゝ
 女前おま玉圓抱つゝも怪猫お魅されて 彼又か飛滅のさるゝも我のうと一筋
 ある自らの下のあつと文句もあつとさる 小あひせさるゝて本店の伊勢物方さるゝ
 小あつとさるゝもさるゝさるゝさるゝ ぬれ家長おあつてさるゝ不踏まの
 と何へへ失つと蹴倒さるゝさるゝさるゝ 不のりさるゝとさるゝさるゝ 中の巻へ

荒磯割京鯉魚腸

名八代目團十郎のほし

久保田彦作著 守川周重画

離の菊操鏡

三編

金花胡蝶

三編

渡辺文京作

守川周重画

冬見立闇鳩

三編

藻塩草近世奇談

三編

守川周重画

藤田仙果作

吉

地水問屋 錦繪

日本橋區西國吉川町五番地 青盛堂 加賀屋

堤吉兵衛

猫々道人原稿



入る家の影より世と
 何卒子み入てと今ふ
 祈るは心の忘れも忘れ果て
 七回忌の祥月
 今日小夜草
 とう人嫁
 入る家の影より
 己が城心も
 てめ

盗み金に替へ
 も替へて
 起つて事悲し
 やい惜やけ
 小冥
 途の

奇責
 サアらせ
 あれと玉
 徳髪つん
 小雷小泣
 あひ連ぬん
 志を伴小
 さ悲しさ
 思ふとさる



小夜の影
 んも消え
 叫ぶ心を
 小夜草
 我を忘れて
 影とわがき
 影と影と
 あひてアと
 斗ふ小侍
 涙をこしく
 涙がコレく
 かろのコレと

つぎ 後景のまゝ
 必助の次郎のまゝ
 何と云ふ浮足と云ふ
 んのうゝ後景のまゝ
 幸橋のまゝ伊勢橋が
 出入りあるある安省の
 為換方ゆく今清保の助
 とのりもの縁
 必助が氣を悲のに
 浮くあひやうけつ
 由後々景と云ふ
 景と水ゆめゆめ



中頃の南へ
 男あつてくれ
 やぐり
 と引せる
 支度小用
 旋とね
 ての涼気
 の水上後
 橋め
 景引
 景引の

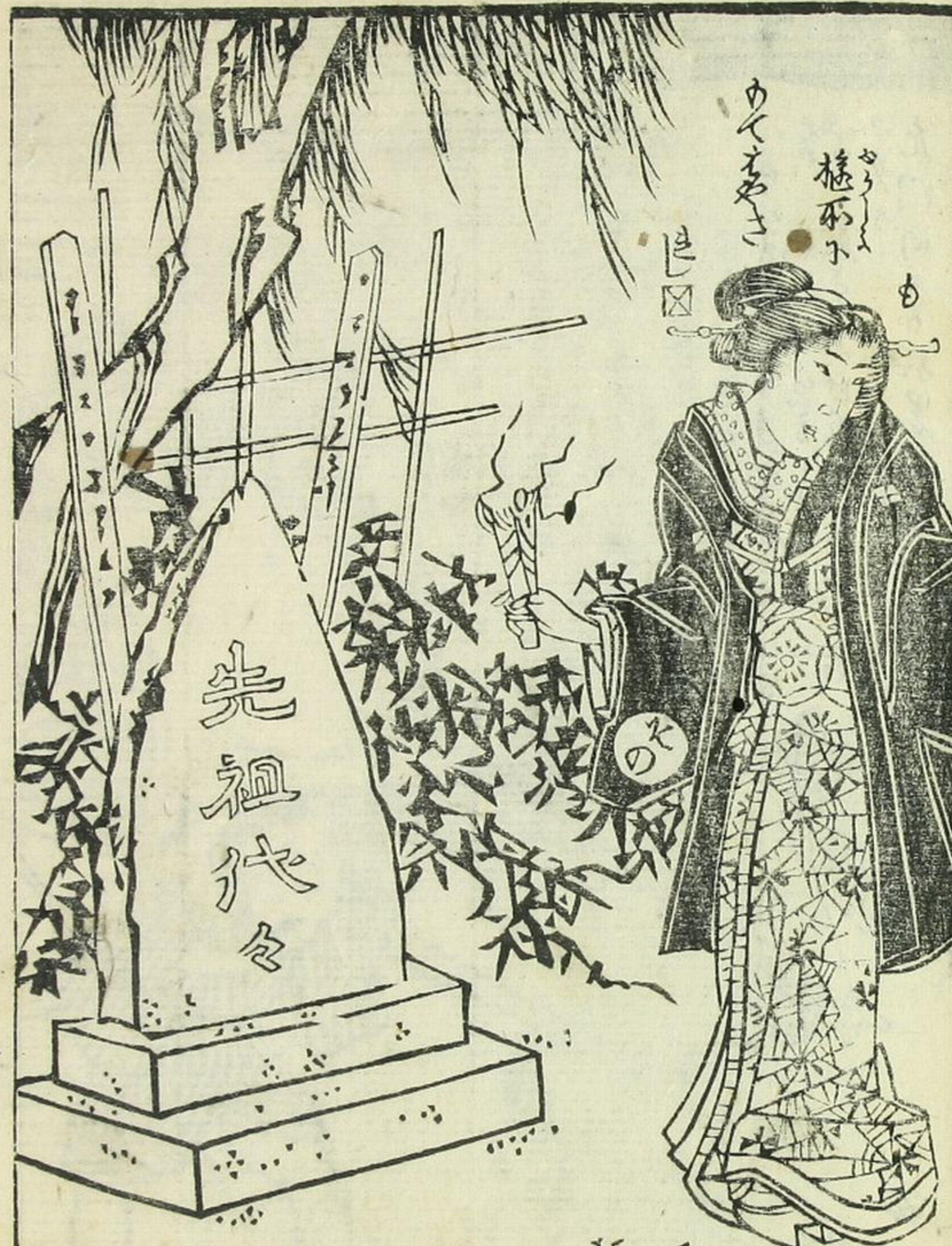


△のまゝ のまゝ日なふ
 後景のまゝとありゆきゆき
 必助の次郎のまゝ
 地の今清保角後景と選順
 と一々本店の利達お存後出
 と喜ひと後景の角後と元出
 〇〇 伊勢橋のまゝ
 廻りくゝ家
 〇〇 八まゝと云ふと云ふ

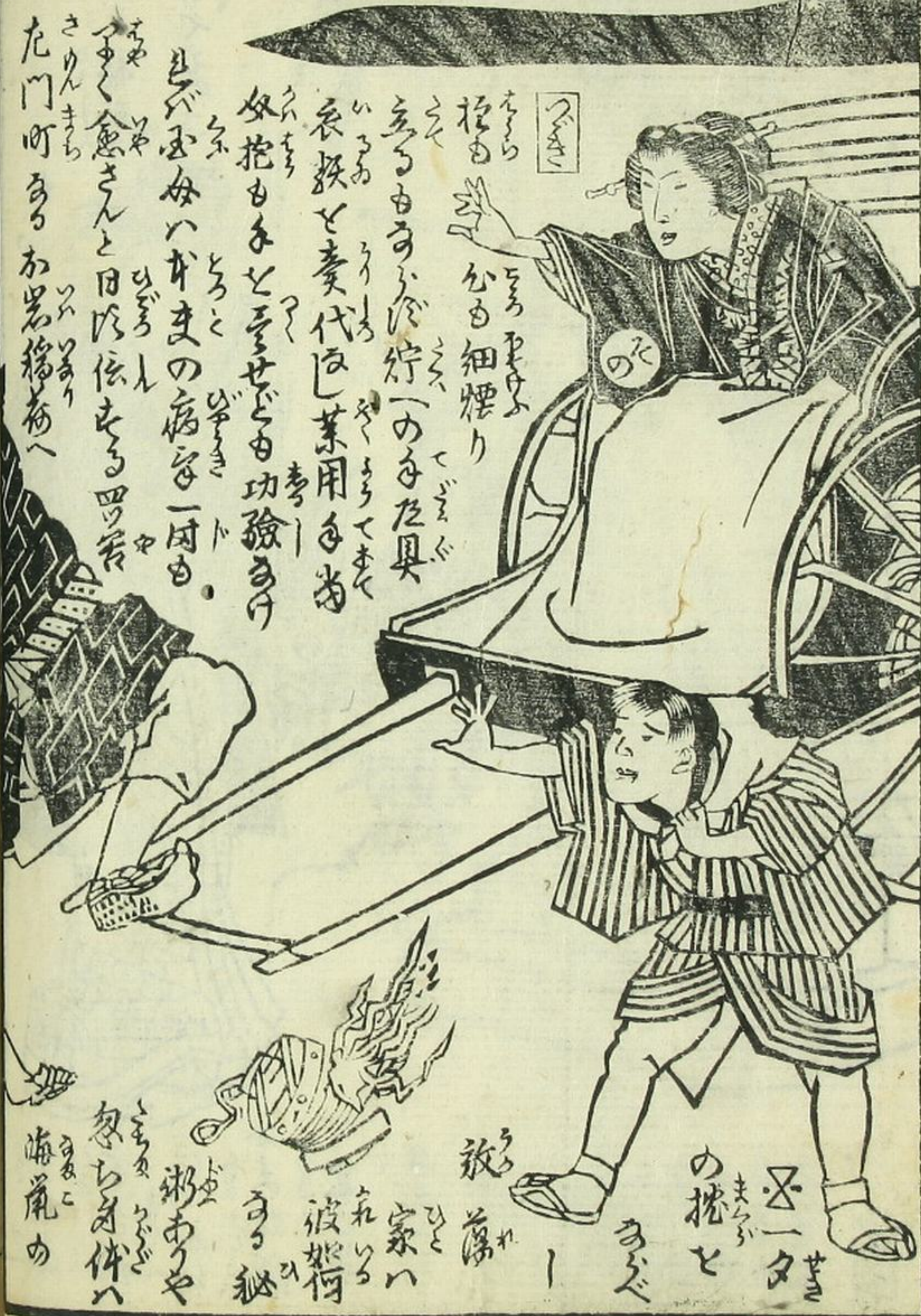
つぎ かく 今後 養分 せ 教 遂 せ あり
 賊 徳 小 業 業 と 失 ひ せ あり 糊 口
 あ も 迫 る 故 下 婢 下 男 あ も 服 せ せ
 築 地 の 家 と も 妻 せ あり
 所 小 せ あり 家 と
 借 受 細 せ 煙 り せ あり
 と 多 肉 業 業 へ 妻 麻 密 斯 皮 膚
 病 せ せ あり せ あり せ あり
 つ せ あり せ あり せ あり
 多 せ あり せ あり せ あり
 驚 いて 知る 天 然 の 逆 皮 せ



の 家 せ あり
 寄 せ あり
 小 せ あり
 築 地 の 徳 せ
 不 幸 せ あり



の あり
 小 田 原
 別 家 家
 次 へ





○一後浪りと漫の繋りも意はうひ

○祭といふ箱庭をわけて来事小多事

たる後ねどろろく福の縁の淵底の

水柱老の懐ひにて此の金でも借金で

結さる場合より遠く望みと還る

も自らの懐中へ入る上は秋物秋の後

も此後よりお夜もとのひなり

先築地辺み定と移り譲て海ある坂

○再び後浪の来をいふ後赤多利

家猫とある料理屋をうめあや下等

な業七み分後を退され療業と

御儀と取巻み定と移り譲て海ある坂

お付ても持たふ病以て多き業へ

移りも附老の業的といふまをて人

合は何と多き業的の肉感の物結

でもあの中放る影の酒味でもあ

と業七みお夜の上二三人毛並の

且取場合懐中の金の封と切二十回

猪の抱へ猫を振させると二百回

業七みお夜の上二三人毛並の

を金と業七より受取て懐中小切の

て各々根付へと還けり

荒磯割烹鯉魚腸

五編 久保田彦作著 守川周重画

渡辺文京作

離の菊操鏡

三編

金花胡蝶

三編 守川周重画

孟斎芳虎画

渡辺文京作

冬見立闇鳩

三編

藻塩草近世奇談

三編

守川周重画

吉

地本 錦繪問屋

日本橋區西國吉川町五番地 青盛堂 加賀屋

堤吉兵衛



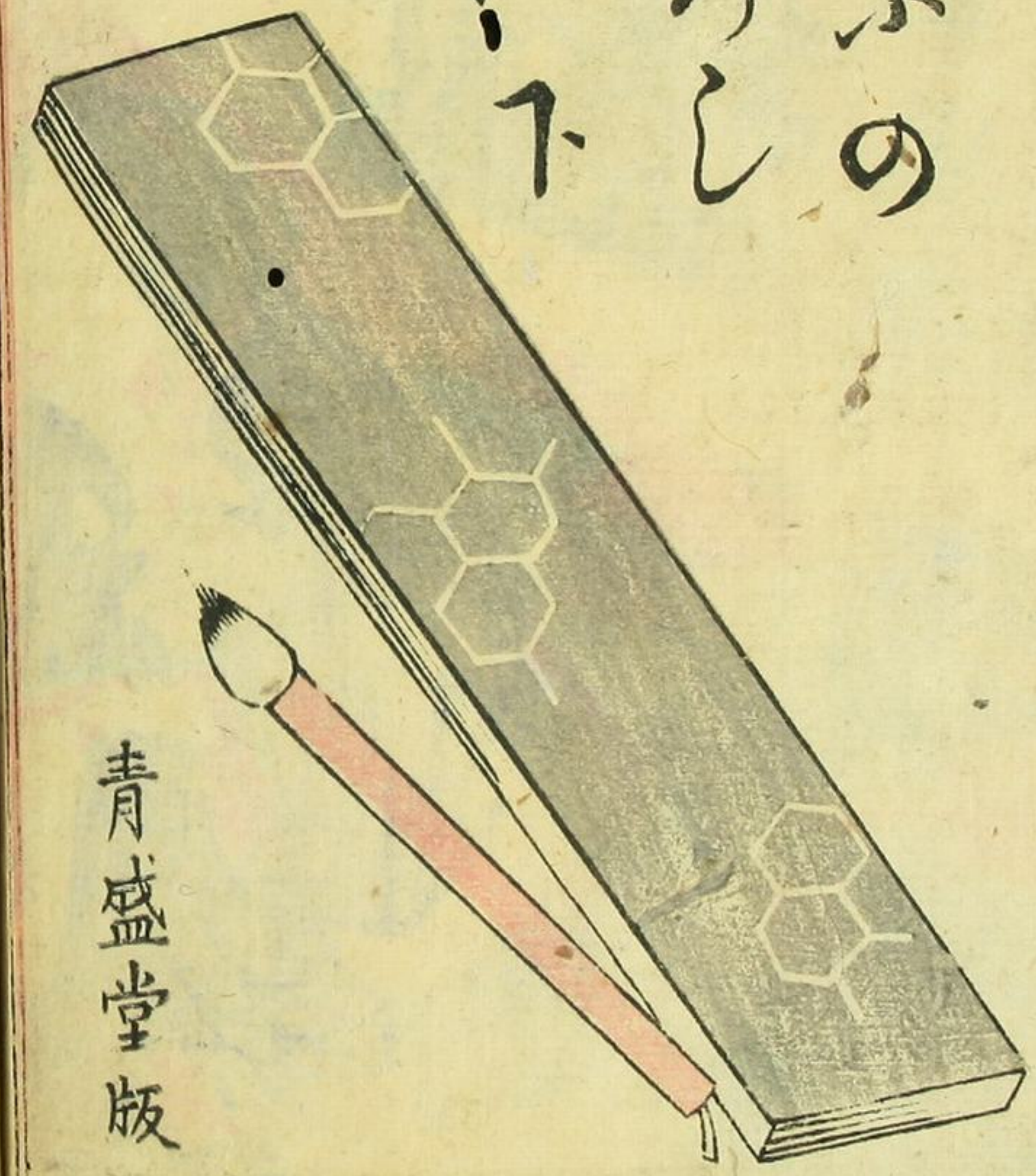
守川周重画

青威風堂書梓



こてふの
まほろし
二へん下

文京綴
園重運



青盛堂版

金花胡蝶幻 第二編下之巻

東京

猫々道人原稿
京文舎文京綴

中之巻より讀つゝき

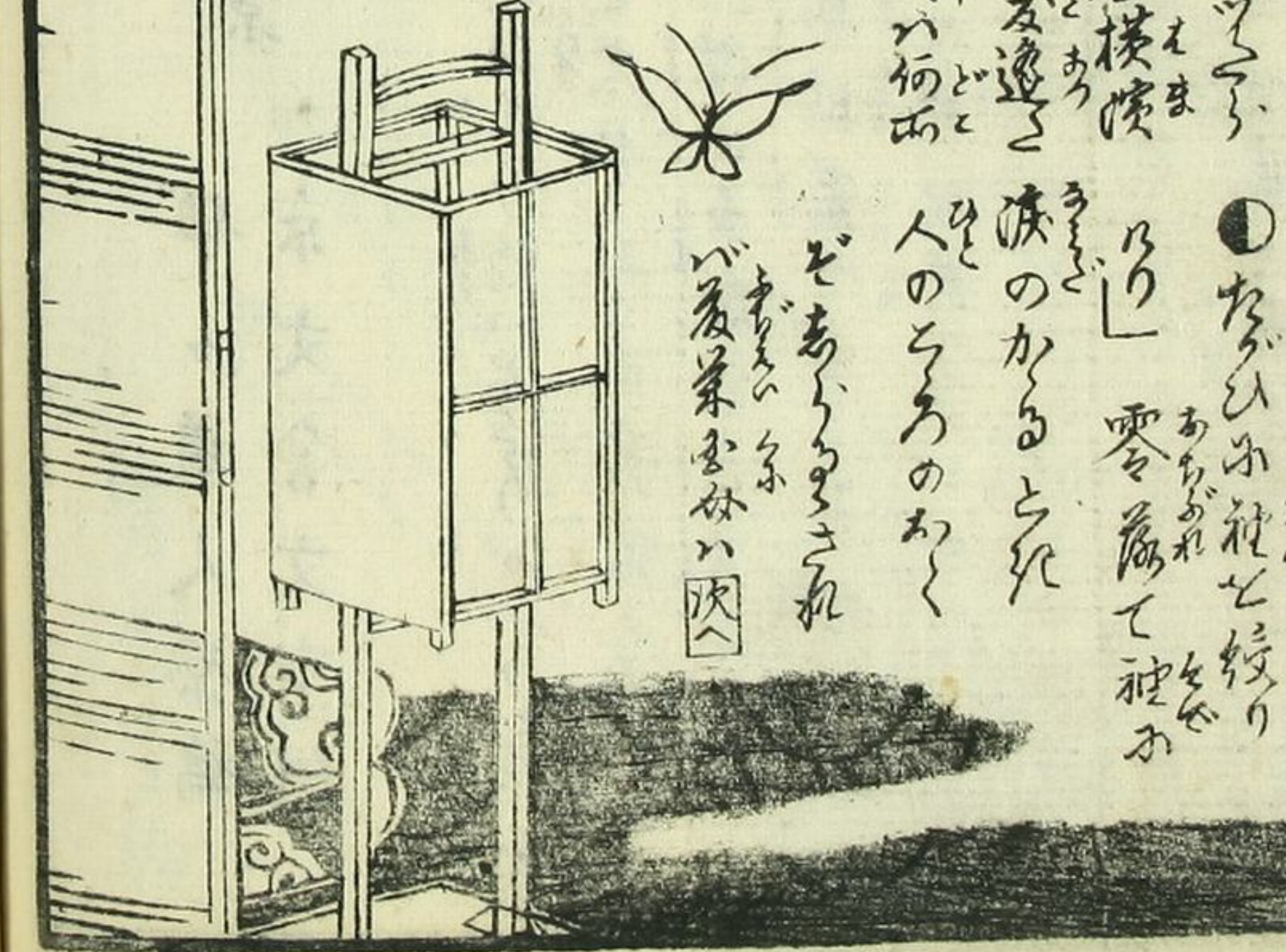
依も彼宗若い取巻見んと根付へ返ひきりぬいなりが一つ後着
羽るの羽の末め小葉若い拵裁酒と久々あうや家持との此會の
凝り頭痛とあり麻ねねまふふ二階の取麻を自分におあけて
船風小舟内と冷ー下婢とを或楊枝箱をとりやせ喉ひき水
の耳たうひ前出でかきーわ紫を錠室丹あとの研きまきーふ
やか海岸を眺むるより由二十一の婀娜めきし清田の醫も素
目々女が素既参りとあしれ風竹息きまめをけく容るふマヤ
るこやうな人ごよト近眼あがふ由素者が膝と定めて

金

因力二下

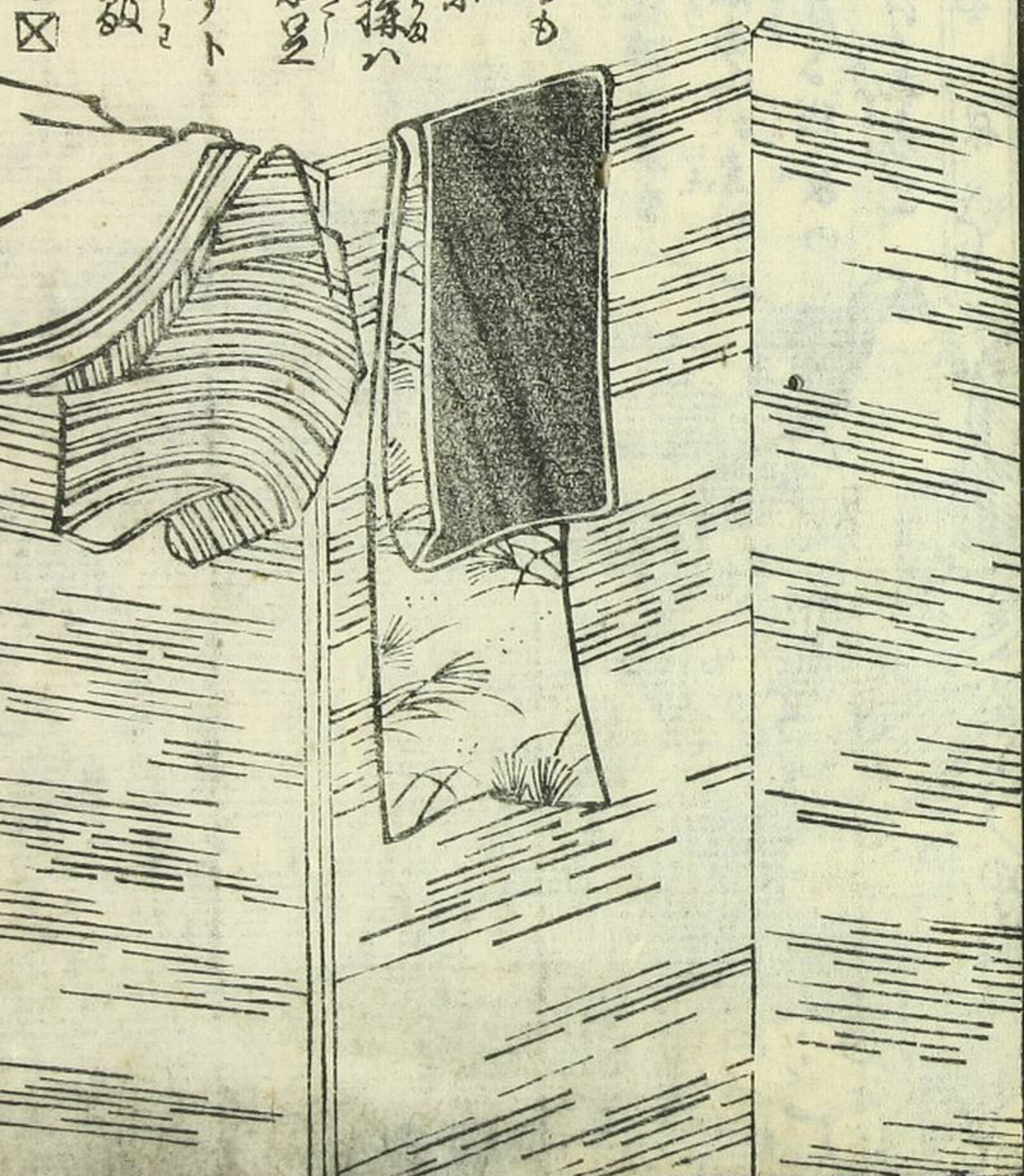
ついで おるるをうとて
 僕（おれ）家の下婢が
 彼女を指さうと
 モレ姉さん一寸
 少佐あつた耶起へ
 ゆく様なか中へ
 この以まを金妻
 の尾張屋より
 三何屋で
 出縁で飛
 金助さんと
 不派河 舞妓や

ついで おるるをうとて
 僕（おれ）家の下婢が
 彼女を指さうと
 モレ姉さん一寸
 少佐あつた耶起へ
 ゆく様なか中へ
 この以まを金妻
 の尾張屋より
 三何屋で
 出縁で飛
 金助さんと
 不派河 舞妓や



● ながひお社を紋り
 乃り 零落て社お
 涙のかると死
 人のうろのわく
 ぞあつたうとされ
 ば後集おめい次へ

ありまゝお退
 されゝる葉さん
 といふ
 旦那が
 冬を前
 へきるも
 みるおの病をふ
 するも果てんえも様は
 だも若さぬへ素足
 まわりの感んぐサト
 可て葉長眉お鎖
 あせオやくどうも



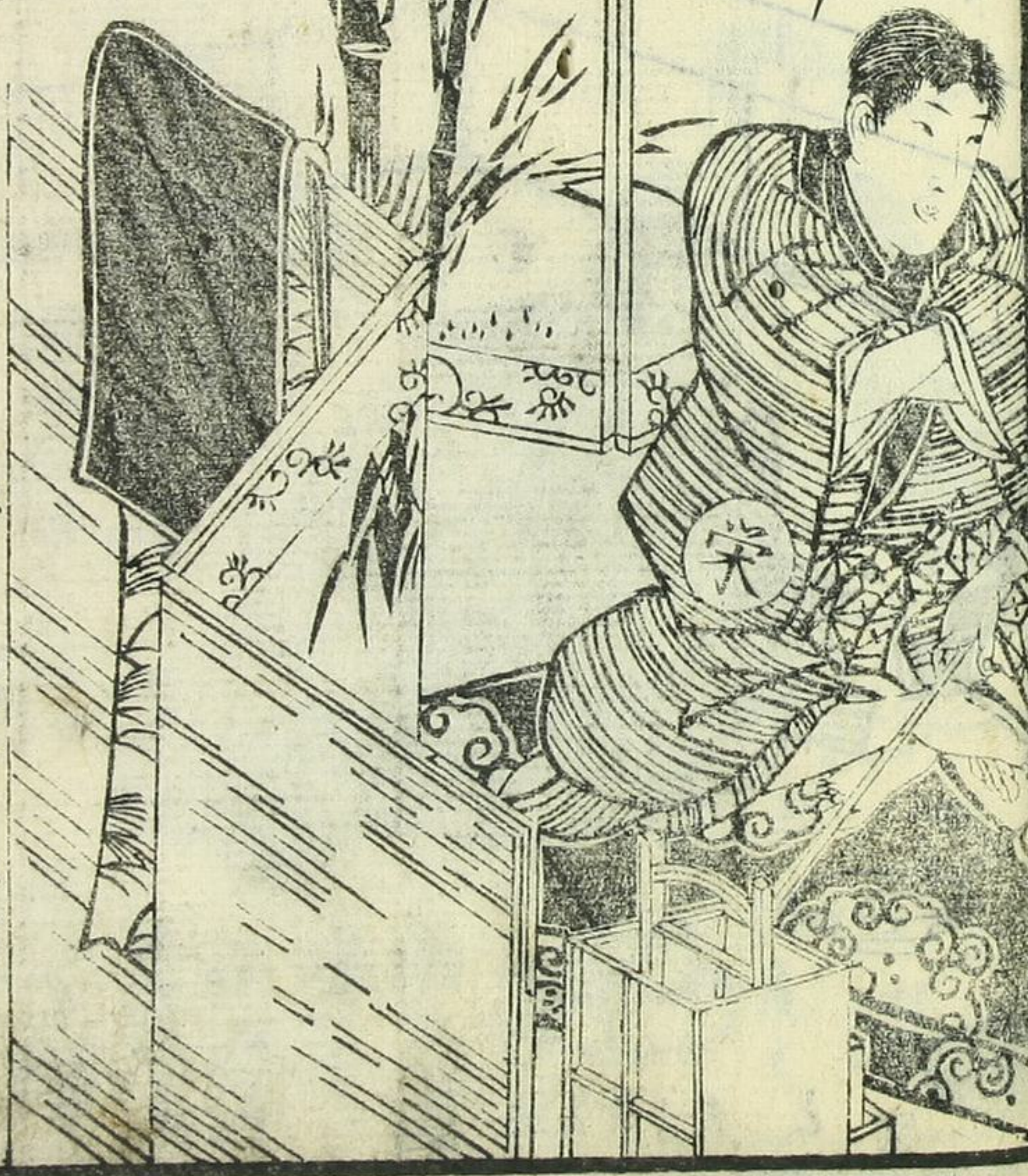
① 素^そ 足^{あし} 生^{なま}の 祈^き意^い
 のか^いろ^ろ 医師^{いし}の^し某^{なり}も
 雨^{あめ}吏^しの^{なり}意^いい
 で^あ居^ゐる^{こゝ}我^わ家^かの^や
 門^{かど}あ^のる^ち者^{もの}と^と



まゝと洩
 る風のちり
 伝づるものハ
 友もまだ死ねぬ
 九月の末つと
 女史の病を
 病癒看養の
 間をやくと
 疾の滞りある
 振引あけうひく
 おもひのき
 厭えはる風
 秋の物まづ



An illustration of a person with dark hair, wearing a kimono with a striped pattern, looking out of a window. Outside the window, there are bamboo stalks and leaves. The scene is rendered in a traditional Japanese woodblock print style.



△ 萬葉に因みて夜忌と（次へ）

つぎに
 勝り「オヤ
 かきり
 今朝
 おまうあ

○アイ
 乃の葉り取り
 雨一て今日ハ小まひ
 のお市一にも困る故
 入解町の伴勢と一寸
 うん私の胸をさく

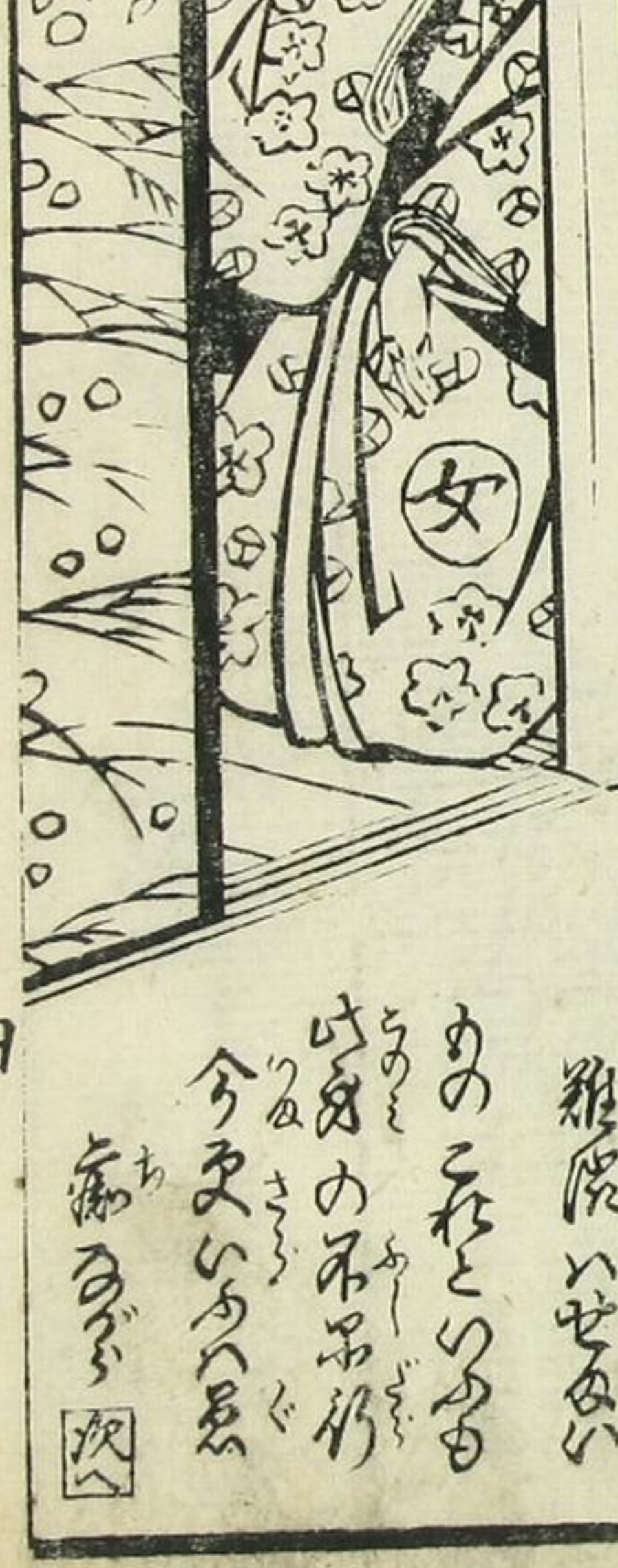


▲あつちの他人の
 経路は短くとま
 入るもの茶
 懐經で
 れど
 かねあぢがれ
 ことえ纏り
 かせぬ
 情社去い
 藝人や
 深之海世
 と おお女児の

まぐさまぐさと口説あつち
 て重田かりあまの起ぬ
 その肉の度らうと足遠
 ふ歩りて掛がけま
 たと同じく足あつち
 膝止交ち掛り
 焼とああ



しと何
 うう何と
 石女世



あのかれといふ
 けあの不あ
 今更いへん
 病るが



新とつくと又男

何処と云く忘る者

お似つらう

まのまの

今

一云

二

お辰栄さんの

お辰栄さん

五



ついでに

一口にけり

お辰栄さん

お辰栄さん

お辰栄さん

お辰栄さん

お辰栄さん

お辰栄さん

お辰栄さん

お辰栄さん

お辰栄さん

これ由久張

お辰栄さんの

お辰栄さんの

お辰栄さんの

お辰栄さんの

お辰栄さんの

お辰栄さんの

お辰栄さんの

お辰栄さんの

お辰栄さんの

お辰栄さんの

お辰栄さんの

お辰栄さんの

つぎとあらんまうと
 者佐助めあま
 けりききとあま
 うんそんトませ
 ぬんそんトませ
 とも

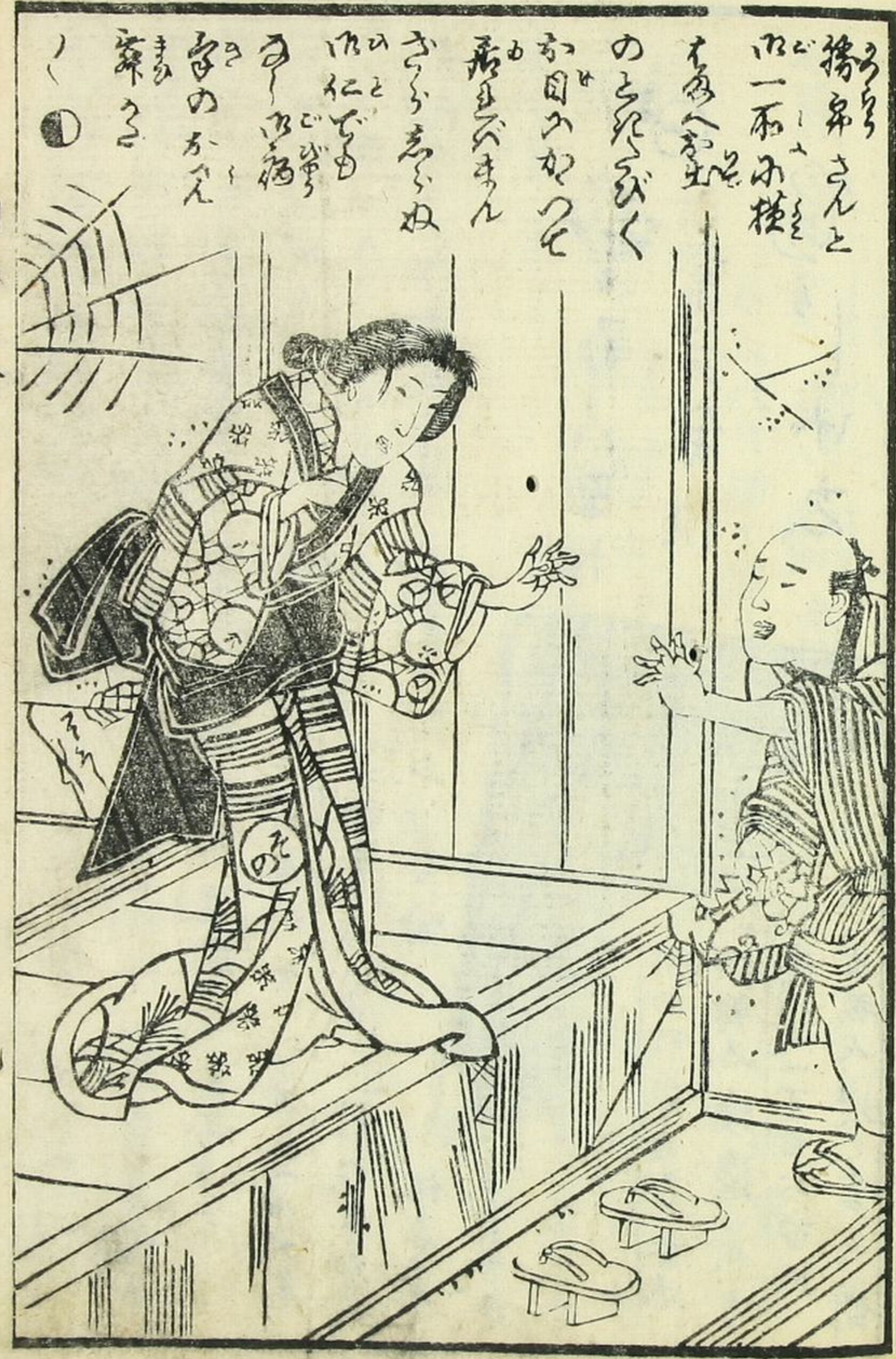


あまの
 二十の
 せつ
 七
 機その



いふふあま
 とりあ
 へん
 何れのも
 文系由一寸一吸
 〇新装もあま
 五すけいあま
 伝居の

あまの
 二十の
 せつ
 七
 機その



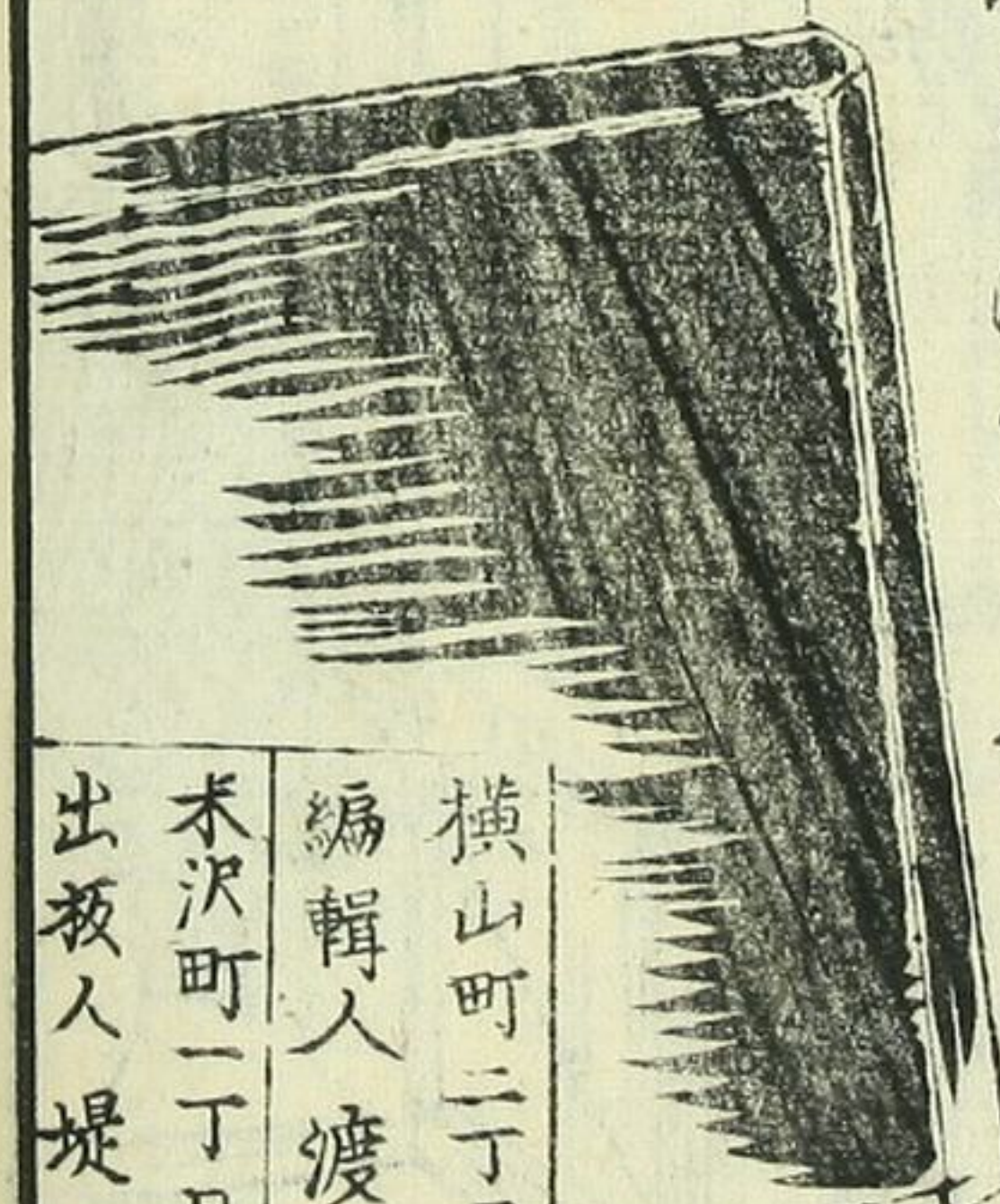
看病入費業のちあひ
 如何なるものうんとの相
 候ふをあらうなるなるも
 まゐりもねねの分るもの
 おる舞のあつちをうん
 失れりうん病人の区

区おああふのを取て
 あひてりさのまじと紙ふ
 つに五田紙幣國助が
 前ふおせの二枚原紙を
 かゝひらき病あうける
 後業が族あうける



京又金銀

りやあ



横山町二丁目十七番地
 編輯人渡邊義方
 木沢町二丁目六番地
 出版人堤吉兵衛

荒磯割京鯉魚腸

名八代目團一郎のほつ

久保田彦作著
 守川周重画

離の菊操鏡

三編

金花胡蝶

三編

孟齊芳虎画

守川周重画

冬見立闇鳩

三編

藻塩草近世奇談

三編

守川周重画

孟齊芳虎画

吉地水問屋

日本橋區西國吉川町五番地
 青盛堂
 加賀屋

堤吉兵衛



明治十九年 永三

山一書

板書 永三

明治十六年季秋購成之

山一表

手書

霜滿家堂
新多詩教
行過在日三
更越山天
心
新多詩教
行過在日三
更越山天
心